

6. 考察 1 装飾付須恵器副葬の特徴からみた「高安千塚」の造墓集団の性格について

今回、調査を行った大阪城天守閣所蔵の高安古墳群資料には、長者の箸塚古墳(大塚・山畑59号墳)から出土した配像付の装飾付須恵器がある。一方、河内の四大群集墳の一つといわれる一須賀古墳群では、装飾付須恵器のうち、子持器台が特に多く出土している。ここで注意されるのは、一須賀古墳群では子持器台が多く出土しているが、配像付の装飾付須恵器は出土していないとみられることである。また、平尾山古墳群においても、平野・大塚10-1号墳で子持器台は出土しているが、配像付の装飾付須恵器は全く出土していない^(注1)

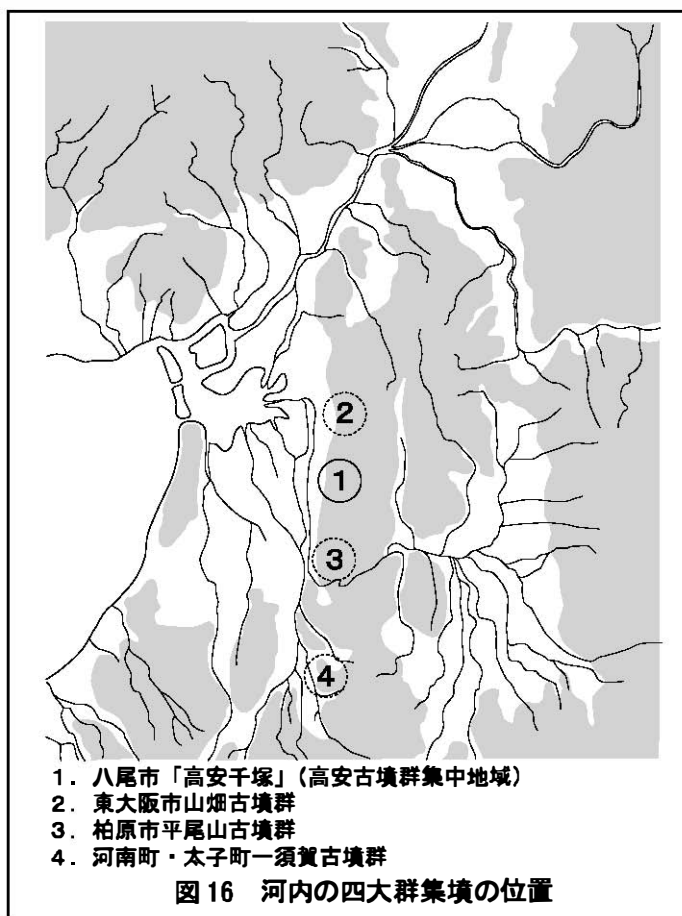
このことから、河内の四大群集墳では、副葬する装飾付須恵器の種類に何らかの特徴があり、その特徴が群集墳の造墓集団の性格を示している可能性があるのではないかと考えた。もしそうであるならば、「高安千塚」^(注2)の造墓集団の性格を考えるための材料の一つとすることができよう。

ここでは、河内の四大群集墳といわれる八尾市「高安千塚」、東大阪市山畑古墳群、柏原市平尾山古墳群、河南町・太子町の一須賀古墳群から出土している装飾付須恵器を須恵器型式別に整理したうえで(図17)、副葬された装飾須恵器の種類の特徴に注目してみたい。なお、「高安千塚」においては、装飾付須恵器は2例のみしか出土していないため、関連資料として高安古墳群内周辺地域の装飾付須恵器も検討の対象とした。

まず、「高安千塚」では、大塚・山畑支群の長者の箸塚古墳出土の配像高坏形器台がある。TK43型式期頃、6世紀第3四半期頃の時期のものである。これは、鉢部の口縁に鉢巻状のかぶりものをした美豆良髪の子持像と鞍を装着した馬の像、鳥の像、短頸壺が付くものがある。また、服部川54号墳からは、壺ないしは甕となる装飾器台の子器片が表面採集されているが(八尾市教育委員会2007)、これは子持器台であるのか、配像高坏形器台の一部であるのか判然としない。

高安古墳群内周辺地域では、4例の装飾付須恵器が出土している。子持器台は2例あり、まず黒谷13号墳出土の子持器台が、TK10型式新段階からTK43型式期、6世紀第3四半期頃のものである。また楽音寺8号墳からは、鉢部中央の子器が高坏となる子持器台の脚部が出土しており、TK43型式期頃、6世紀第3四半期頃のものである。なお、大阪城天守閣所蔵の子持器台が高安古墳群出土品であるとすれば、6世紀第2四半期頃の子持器台を出土する古墳が存在したことになる。また、配像高坏形器台では、大石古墳(楽音寺7号墳)から、鳥の像と長頸壺が付く配像高坏形器台が出土しており、TK43型式期、6世紀第3四半期頃の時期に位置づけられる。さらに恩智遺跡出土と伝えられる配像付の長脚付壺がある。この資料の時期は、長頸壺の形状が、東大阪市山畑22号墳出土の配像付の長脚壺と似ている。東大阪市山畑22号墳出土例は、TK10型式新段階頃の須恵器坏と共に出土していることから、6世紀中葉頃の時期とみられる。このことから伝・恩智遺跡出土例も同様の時期とみてよいであろう。

以上みたように、「高安千塚」においては、確実に器種を確認できた装飾付須恵器は、長者の箸塚古墳出土の配像高坏形器台のみであり、資料が少なく様相が判然としない。高安古墳群内周辺地域、



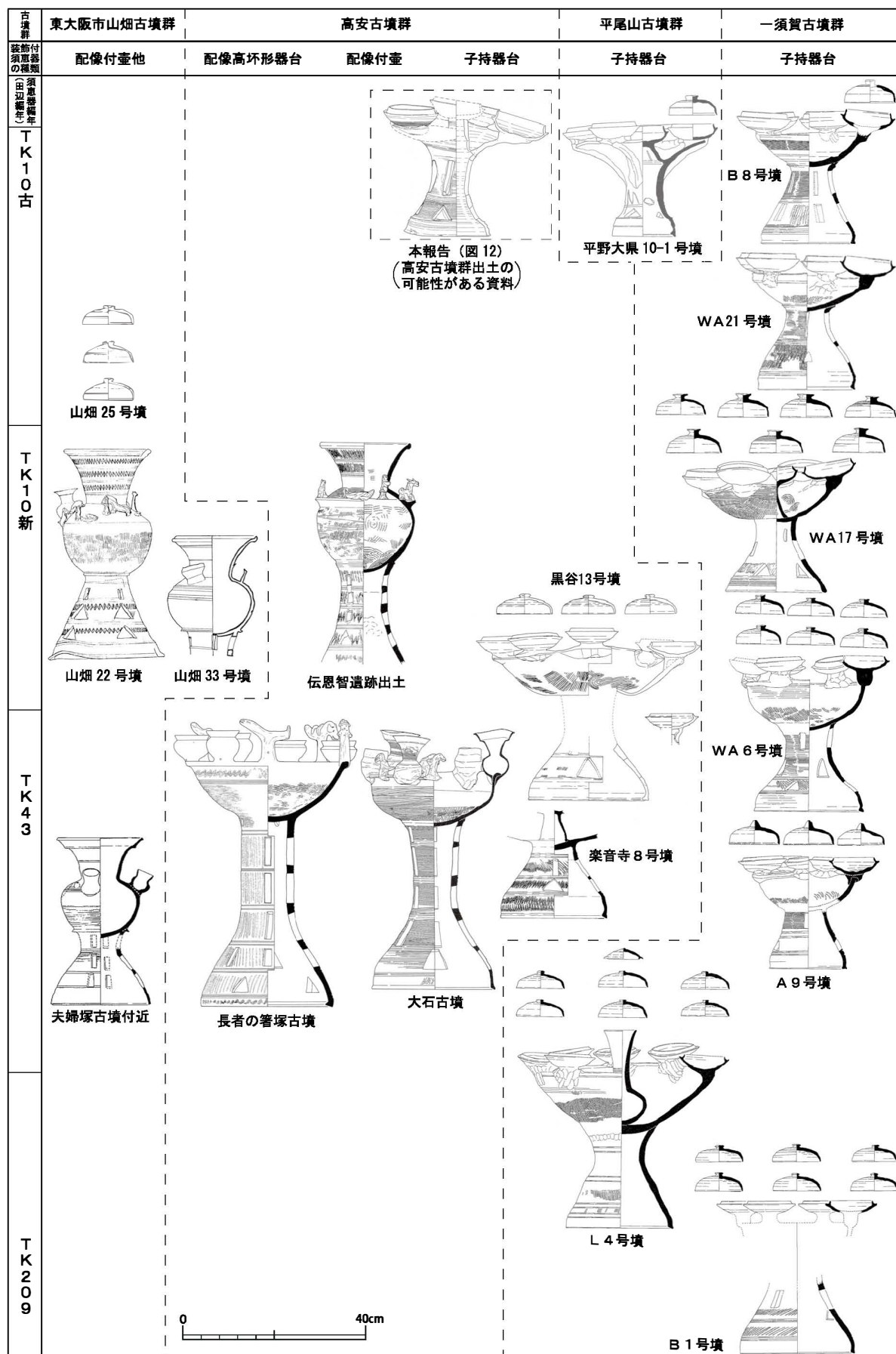


図17 河内の四大群集墳における装飾付須恵器の変遷

では、子持器台、配像高坏形器台・配像付の長脚付壺が出土している。

東大阪市山畑古墳群からは、3例の出土がある。まず、山畑22号墳出土の配像付の長脚壺は、前述のとおり、6世紀中葉頃の時期とみられる。また、山畑33号墳からは、肩部に壺が付く長脚壺が出土している。山畑25号墳からは子持器台の子器の蓋とみられるものが出土し、TK10型式古段階、6世紀第2四半期頃のものともみられるが、装飾器台の本体が出土しておらず、判然としない。以上から東大阪市山畑古墳群では、配像付の長脚壺、子持の長脚壺といった装飾付須恵器が副葬されており、子持器台も副葬されていた可能性がある。東大阪市山畑古墳群は、総数68基(本来は100基前後)の古墳からなる群集墳である(中西2006)。東大阪市では、神並古墳群の夫婦塚においても、乗馬する人物や鞍装した馬等の配像付の装飾須恵器が出土している。堀田啓一氏は山畑22号墳や夫婦塚古墳が双円墳であることに注意され、これらと新羅の双円墳との関連性を指摘されている。さらに夫婦塚の装飾付須恵器については、渡来系の馬飼いや集団の家長層の被葬者の可能性を考えられている(堀田1997)。私は、東大阪市の山畑古墳群等で確認されている双円墳と新羅の双円墳との関連性については、時期差もあり、直接的に結びつけるのは、現段階では資料不足ではないかと考える。また、配像付装飾須恵器は、新羅の陶質土器の影響を受けたものとみられるが、6世紀後半段階の装飾付須恵器について、直接的に新羅との関連性を考えることは難しい。東大阪市山畑古墳群からは、ミニチュア炊飯具や釵子等の渡来系遺物は出土しておらず、石室の玄室平面プランも玄室幅指数の低い細長の長方形プランである。山畑古墳群の造墓集団については、むしろ在地的な集団が主体であったと考えられる。

次に平尾山古墳群では、平野・大県10-1号墳からTK10型式古段階、6世紀第2四半期頃に位置づけられる子持器台が出土しており、本墳からはミニチュア炊飯具セットや金銅製釵子、銀製指輪も出土している。平尾山古墳群からは、現段階では配像付の装飾付須恵器は全く出土しておらず注意される。平尾山古墳群は1407基を数える大型群集墳である。釵子やミニチュア炊飯具、指輪を出土する古墳があることや、鉄鍛冶関連の副葬遺物から、文人や技術者の渡来系集団が主として造墓した群集墳と考えられている(安村2008)。

一須賀古墳群からは7例の子持器台が出土している。TK10古段階期の6世紀第2四半期頃に位置づけられるものがB8号墳・WA21号墳から、TK10新段階期の6世紀中葉頃に位置づけられるものがWA6号墳・WA17号墳から、TK43型式期の6世紀第3四半期頃に位置づけられるものがA9号墳・L4号墳から、TK209型式期の6世紀第4四半期～末頃に位置づけられるものがB1号墳から出土している。一須賀古墳群は総数262基の群集墳であり、石室玄室プランが方形に近いものが多く、釵子やミニチュア炊飯具セットを多く出土する。B7号墳からは金製垂飾付耳飾が、D4号墳からは金銅製釵子や金銅製飾金具が出土している。このことから、渡来系集団の造墓による群集墳と考えられる。

ここで注意されるのは、渡来系集団との関係の強い群集墳である一須賀古墳群、平尾山古墳群から出土する装飾付器台は、子持器台を主体とし、配像付の装飾付須恵器を出土していないということである。このことは何を示しているのだろうか。子持器台自体は、渡来系要素をもつ遺物ではない。しかしながら、発掘調査が比較的なされている一須賀古墳群や平尾山古墳群において、これまで配像付の装飾付須恵器が確認されていないとみられる点、特に一須賀古墳群では子持器台が多く副葬されている点に注視すると、やはり造墓集団のアイデンティティに関わる何らかの理由があったとみられるのである。平尾山古墳群は、百済出身の渡来人そのものの墓と推定されている5世紀後半に造られた高井田山古墳(安村2008)との関連性も注意される。このことから一須賀古墳群や平尾山古墳群においては、渡来系集団の出自に関わる何らかの理由で、配像付の装飾須恵器を副葬することが避けられた可能性が想定されるが、具体的な理由については、判然としない。ただ、一須賀古墳群や平尾山古墳群の造墓集団が、渡来系集団としてのアイデンティティを強く持った集団であったということは示す資料の一つであるということはいえるのではないかと考えられる。

一方、「高安千塚」では配像高坏形器台が長者の箸塚古墳から出土し、高安古墳群内周辺地域においては、子持器台と配像付の長脚壺の両者が出土している。特に「高安千塚」では、資料が極めて少ないが、一須賀古墳群や平尾山古墳群のように、子持器台のみを副葬するという限定性は認められない。「高安千塚」の造墓開始期の石室には、韓式系土器、ミニチュア炊飯具を副葬する郡川16号墳をはじめ、渡来系の要素が認められる。しかし、6世紀後半には、全体に渡来的な要素は認め

られなくなるようである。「高安千塚」においては、発掘調査例が他に比べて少ないため、今後の資料の増加を待たなければならないが、渡来系集団としてのアイデンティティが、一須賀古墳群や平尾山古墳群の造墓集団ようには強くはなく、造墓当初期の渡来系集団を核として、在地化が進んだ集団であった可能性が考えられる。「高安千塚」の造墓集団については、その石室規模が大きいこと、石室構築技術の高さ、また、石室規模に階層性があること等から、畿内政権と強い関係をもった中河内の有力集団に統括された渡来系集団の可能性を考えてきた(吉田2010)。今回の検討では、副葬された装飾付須恵器の種類の特徴から、「高安千塚」の造墓集団が強いアイデンティティをもった純粋な渡来系集団ではなかった可能性を考えた。

「高安千塚」の造墓集団を考えるための出土遺物の資料は少ないが、河内の四大群集墳をはじめとする他の群集墳との比較等を通じて、今後も検討を進めていきたい。

群集墳	総数	出土装飾付須恵器	渡来系遺物
山畑古墳群(東大阪市)	68基(本来100基前後か)	配像付装飾壺(山畑22号墳)・肩部に子器を付けた装飾付壺(山畑33号墳)	
高安古墳群集中地域(「高安千塚」)(八尾市)	226基	配像高坏形器台(長者の箸塚古墳(大窪・山畑58号墳)・壺等となる子器部片(服部川54号墳)	ミニチュア炊飯具・韓式系土器
高安古墳群周辺地域	79基	配像付装飾壺(伝恩智出土)・配像高坏形器台(大石古墳(楽音寺7号墳)・子持器台(黒谷13号墳・楽音寺8号墳)	
平尾山古墳群(柏原市)	1407基	子持器台(平野・大県10-1号墳)	釵子・ミニチュア炊飯具・銀製指輪
一須賀古墳群(太子町・河南町)	262基	子持器台(B8・WA21・WA17・WA6・A9・L4・B1号墳)	釵子・ミニチュア炊飯具・金製垂飾付耳飾・金銅製飾金具・指輪

河内の四大群集墳における装飾付須恵器

(注1) 柏原市立歴史資料館安村俊史氏のご教示による。

(注2) 八尾市教育委員会では現在学術上、高安千塚と称されている古墳が密集する部分も含め山麓の古墳群全体について高安古墳群の遺跡名を付しており、遺跡名の変更を検討しているところである。このため、本稿では便宜上、高安古墳群内の古墳集中地域は、鍵括弧付で「高安千塚」と称し、それ以外の部分は、高安古墳群内周辺地域と称している。

[参考文献]

- 中西克広 2006「山畑古墳群について」『ミニシンポジウム河内の四大群集墳』柏原市立歴史資料館
堀田啓一 1997「河内の双円墳について」『堅田直先生古希記念論文集』
安村俊史 2008『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂出版
山田邦和 1989「装飾付須恵器の分類と編年(上・下)」『古代文化』第41巻8号・9号
吉田野乃 2010「八尾市教育委員会における「高安千塚」の調査」『高安千塚シンポジウム記録集2』八尾市教育委員会
八尾市教育委員会 2007『高安古墳群分布・測量調査報告書』